

## 大乘經典の成立

### 一、經典成立の基盤

大乘仏教成立以前に大乘經典は無かつたわけであるから、大乘經典はいかなる基盤から発生したかを考える必要がある。これには、その思想的な基盤と、教団的生活的な基盤とを分けて考える必要がある。しかし大乘經典自身には、大乘仏教がどこから発生したかを明確に語っているところはない。したがってこれは飽くまで推定の問題に属する。

先づ大乘經典の思想的源流を考える場合に重要なことは、大乘仏教の思想的バックボーンは何であるかを定め

平 川 彰

ることである。そしてそれがどのような先在思想につながるかを考える必要がある。大乘仏教の教理の中で、第一に重要な教理は、六波羅蜜の教理である。これは『般若經』に詳しく説かれているが、しかし『般若經』だけでなく、大乘經典に広く説かれている。むしろ『般若經』は、六波羅蜜の中でとくに般若波羅蜜を重視することを説く經典である。すなわち六波羅蜜にたいする反省の上に成立した經典が『般若經』であると言ってよからう。ともかく六波羅蜜の源流がどこから来たかを考える必要がある。

次に『般若經』が五波羅蜜の根底に般若波羅蜜のある

ことを認めて、『般若波羅蜜經』を説いたその思想的根底には「空の智慧」があると思う。すなわち般若波羅蜜の「般若」とは智慧のことであるが、その智慧は空智・無執著の智慧である。菩薩は無量無辺の衆生を般若涅槃に導き入れるが、しかしそこには導いた人もなく、導かれた人もない。そのように聞いても何らの怖れも感じない人が菩薩であるという<sup>(1)</sup>。これを可能にするものは、虚無に陥らない空の智慧である、この空の思想が、大乘仏教の根底に流れる思想である。

空智に住しながら虚無に陥らないのは、菩薩に大悲の精神があるからである。自利一偏の声聞乘を批判して、大乘仏教が興ったのは、大乘が仏陀の大悲の精神を受けついでいるからである。菩薩は發菩提心によって、「我れは菩薩である」との菩薩の自覺を生ずるのであるが、この發菩提心とは、無量無数の時間において、無量無辺の衆生を涅槃に導かんとする決心である。これは同時に自覺と覺他をかねそなえる自利利他の精神となる。この自利利他、大悲の精神が大乘仏教の大きな特色である。

第四には、以上の如き菩提心を發しうるのは、仏陀に

ら、世界に遍満する仏陀が説かれている。

このような偉大な仏陀觀から、種々の仏陀論が發展している。とくに人格的法身仏の思想は、部派仏教に見られない大乘独自の仏陀觀である。そしてそれより、法身・報身・応身等の三身説・四身説が發展している。

さらに自性清淨心の思想は部派仏教にも見られるが、大乘經典には仏性の思想として發展し、仏の家に生まれる、仏子、種性、如来藏等の思想として發展した。悉有仏性の思想も大乘仏教の特色ある教理である。

次に、大乘の三昧と関連して、唯心の思想も重要である。唯心思想は如来藏説とも結合したが、他面では唯識の教理を展開した。

大乘教理の特色は、なお細かく挙げれば多くを指摘しうが、以上の如き諸教理の源流をすべて説明することは困難である。しかしその主なるものについて見るならば、第一に六波羅蜜の思想は仏伝文学に密接な関係が認められる。六波羅蜜の教理や成仏のための長遠の修行の順序、仏の家に生まれ、灌頂（アビシエーカ、阿惟願）を受けて仏位を継ぐ等の思想は仏伝文学に説かれており、十

対する深甚なる帰依、信仰があるからである。仏陀に深く帰依するが故に、自らも仏陀に倣って、三阿僧祇劫の難行を遂行して、成仏を達成せんとする決心を起すのである。このように、仏陀に対する限りのない帰依、信仰が大乘仏教の大きな特色である。

次に仏陀にたいする無条件の帰依ということとは、三昧の修業に基づく点が大きいと思う。『小品般若經』には「諸法無受三昧」を説き、<sup>(2)</sup>『大品般若經』には首楞嚴三昧をはじめとする「百八三昧」を説いているが、その他にも「般舟三昧」がある。般舟三昧は觀仏三昧の一種であるが、菩薩は三昧の修行において、定中に仏を見、この仏陀から種々の教示を受けて、その内容を説示したものが諸多の大乘經典となったのである。そのために大乘仏教には雄大な仏陀觀が説かれている。『華嚴經』のヴィルシヤナ仏や『法華經』の久遠実成の釈迦仏をはじめ、般若經の釈迦仏でも、「三千大千国土において、その徳特尊、光明色像、威徳巍巍として、遍く十方の恒河沙等の如き諸仏の国土に至る」<sup>(4)</sup>と述べられ、三千大千世界に光明のとどく仏陀である。このように大乘仏教の初期か

地の教理も見られる。したがって仏伝文学が大乘の教理の發生に有力な機縁になったであろうことは、容易に推知される。仏伝文学はさかのばれば本生經（ジャータカ）につながるものであり、本生經や仏伝文学は部派教徒の手で發達したものと見てよい。

その点で『般若經』等は部派仏教とつながりが強いように思われるが、しかし仏伝文学は釈迦仏の成仏の伝記を述べたものであり、行者自身の成仏の行を示さんとするものではない。ここに、仏伝文学と大乘との大きな違いがある。大乘の菩薩は自ら菩提心をおこし、仏にならうて成仏の行を実践しようとするものである。自ら菩薩の自覺をおこすのであるから、釈迦菩薩の行蹟を述べんとする仏伝文学の立場とは異なる。そこには菩薩觀の転回がある。その転回をなさしめたものは、仏伝文学とは別の理念であったと言わねばならない。

もう一つ大乘仏教の先行思想として重要なものは、仏塔信仰である。仏塔信仰は多くの大乘經典に説かれており、大乘の菩薩が塔寺（仏塔）に住していたことは、多くの經典に示されている。しかし部派仏教でも仏塔信仰

をしていたから、大乘の出家菩薩の住した塔寺が部派仏教と無関係であったと断言することは困難であるが、しかし大乘經典にはくり返し「声聞衆と辟支仏衆に随してはならない」ということが強調されているから、生活の場としても、出家菩薩は部派仏教の精舎（ヴィハール）とは別の塔寺（スツーパー）に住していたと考えられる。そのことを示す資料も多い。

しかも仏塔信仰は仏陀の舍利を礼拝するのであるが、しかし物質としての遺骨を礼拝することによって、それを媒介として法身の仏陀を礼拝し、信仰したのであると考えられる。そしてここから仏陀中心の慈悲に基づく大乘仏教が興起したことは十分に推定しうる。そして仏陀にたいするひたむきな帰依から、自らも仏陀にならって成仏の行をなさんとする「菩薩の自覚」を、おこした者もあつたであろうし、同時にいっぽうでは、仏陀の大慈悲にすがって救済されんことを望む「仏の救済の教理」も発展したであろうと考えられる。

しかも『般若三昧経』や『郁伽長者経』、その他の大乘經典には、出家菩薩の住所は、塔寺と阿蘭若であるこ

とが説かれている。塔寺には仏塔が祀られており、自らも仏塔を礼拝するが、同時に信者達が仏塔礼拝に往詣したであろう。したがってこれらの信者の仏塔への供物によって、仏塔に居住する菩薩達は生活をなし得たわけである。上記の經典や『十住毘婆沙論』等によれば、菩薩は阿蘭若住を主とするが、しかし病気の時や、經典を学習するとき、和尚や阿蘭若に随侍する時等には塔寺に帰るといふ。したがって阿蘭若においては烈しい三昧の修業をなし、その禪定の体験から種々の大乘經典が説かれたが、それらの經典が塔寺に伝持され、教示されて、師から弟子へと伝えられたと考えることができる。

ともかく大乘にも教団がなければ、生活の地盤がないことになるから、修行生活の場がないことになる。さらに教法を次の世代に伝え、及び弟子を教育する生活の場がないことになる。その点からも、大乘独自の生活の場を、大乘經典の記述の中に求めるならば、それは塔寺と阿蘭若であつたと言わざるを得ないものである。塔寺と阿蘭若の修行生活があれば、それに適する大乘の戒律がそこに成立することになる。その際、大乘經典に広

く説く戒波羅蜜の内容は十善戒であり、これが大乘戒の基本であるが、十二頭陀等も実行せられており、さらに波羅提木叉の二五〇戒も、のちには導入せられている。

ともかく生活の基盤なしには、修行の場所も、教理の展開も、教法の次代への伝達も困難であるのであり、その点からも仏陀への信仰を中心とする塔寺の生活が、大乘仏教の興起に密接な関係があつたと見てよい。またそのように見たとき、上述の如き大乘教理の興起が矛盾なく理解できる。

## 二、初期の大乘經典

初期の大乘經典の成立を検討しうる歴史的資料はインド仏教には見当たらない。インドは歴史のない国と言われるが、初期の大乘仏教について記録した歴史的文献は見当たらない。さらに考古学的資料にも、大乘教団や大乘經典の成立の研究に利用しうるものは少ない。インドは暑熱が厳しく、雨期には湿気も多いために、古い写本は二三の例外を除いて残っていない。ネパール等に保存される經典の写本は古いものでも十一世紀、大部分は十四・

五世紀以降のものである。そのために写本類も大乘仏教の興起の研究には役立たない。さらにチベット仏教への經典の翻訳も、大部分は九世紀以後であるために、同様に初期の大乘經典の研究の第一資料とはなり得ない。

しかし幸い中国仏教への大乘經典の翻訳年代が、大乘仏教興起の年代と近い関係にあるために、漢訳經典の在り方から、インドにおける大乘經典の成立事情を推知することが可能である。例えば『法華経』について見るに、竺法護が太康七年（二八六）に訳した『正法華経』十卷には、竜女成仏を説く「提婆達多品」を「七宝塔品」の中に含んでおり、さらに「囑累品」を經典全体の最後に移している。しかるにそれより百二十年ほど後に羅什が弘始八年（四〇六）に訳した『妙法蓮華経』七卷には、「提婆達多品」は含まれていなかったし、「囑累品」も『法華経』が一応の完成を見た第二十二品に置かれている。これは、羅什訳の『妙法蓮華経』の原本の方が、『正法華経』の原本より古形を保っていたことを示すものである。この点は諸家の等しく認めるところである。このことは、『法華経』がこの時代にはなお浮動の状態にあつ

たことを示すものであり、形成の中途にあったことを示す。それ故、羅什訳の原本は、竺法護訳よりも古く、したがって西紀二五〇年以前の状態を示すとみてよい。したがってその内容を『般若経』その他の諸大乘経典と比較することによって、『法華経』の出現の時期や、その経典形成のプロセス等を検討することが可能になるのである。

大乘仏教の興起を考える場合、アショーカ王（紀元前二六八―二三二年在位）の法勅には、大乘仏教の興起を示唆するような文句は全く見当たらない。したがって大乘仏教の運動は、少なくともそれより百年ほど後、即ち西紀前二世紀以後であつたと見てよからう。しかるに中国への大乗経典の訳出を見るに、後漢の桓帝・靈帝（一四六―一八九在位）の時に、大月氏より洛陽に來た支婁迦讖（支謙）は、光和、中平（一七八―一八九）年間に、「十四部、二十七卷」の大乗経典を訳出している。<sup>5)</sup>この十四部の中には種々の大乘経典が含まれているために、西紀一五〇年以前に、かなりの大乘経典が成立していたことが分るのである。この十四部二十七卷とは、次の如くで

ある。

- 1 『道行般若経』十卷
- 2 『首楞嚴経』二卷
- 3 『般舟三昧経』一卷
- 4 『偈真陀羅経』二卷
- 5 『方等部古品日遺日說般若経』一卷
- 6 『光明三昧経』一卷
- 7 『阿闍世王経』二卷
- 8 『宝積経』一卷
- 9 『問署経』一卷
- 10 『胡般泥洹経』一卷
- 11 『兜沙経』一卷
- 12 『阿闍世王経』一卷
- 13 『字本経』二卷
- 14 『内蔵百品経』一卷

以上「十四部二十七卷」である。これらの中には、現在欠本になっているものもあり、さらに現伝本と経名の異なるものもあり、現伝本との比定には詳しい研究を必要とするものである。

### 道行般若経

これらの中で最も重要なのは『道行般若経』である。これは羅什訳の『小品般若経』（梵本八千頌般若）と同系統の経典であるが、すでに品数が三十品あり、小品や梵本などと内容はほぼ同じであり、『小品般若経』としては完成の域に達している。しかもこの三十七章の間には新古の層があり、最も古い「道行品第一」、「難問品第二」、「功德品第三」等は、三十品全部の成立時よりかなり古い。即ち『道行般若経』の現在形を西紀百年ごろと見れば、最古の成立である「道行品」等の成立は西紀前後のころにまでさかのぼり得るのである。

したがって大乘仏教の出現は西暦紀元前後のころと見ることが出来る。『道行般若経』巻四には、如来滅後に『般若経』は南インドに伝わり、それより西インド、更に北インドに伝わったと言っている。これは『般若経』が最初に南インドで成立したことを示すものであるうか。上述の如く「道行品」には「諸法無受三昧」が説かれているので、この三昧を行じた菩薩たちによって『般若経』が説かれたのであろう。

その後、『般若経』には、小品系より少しおかれて大

品系の『放光般若経』二十巻が訳出せられており、『大品般若経』が成立した。大品には小品と異なり、かなり進んだ教理が見られる。さらに『金剛般若経』は一卷の小経であるが、その成立は大品より少しおくれるであろう。その後、更に種々の『般若経』が作られ、最後には玄奘が六六〇年から六六三年にかけて訳出した『大般若波羅蜜多経』六百巻が成立したのである。このように大部の『般若経』が成立したのは、般若波羅蜜の功德はどれだけ説いても、説きつくすことができないという意味があるが、同時に『般若経』には、経文の憶持や經典の書写を功德の多いこととして勧めている。このことも『般若経』の写本の多い理由になるであろう。「經典書写」は、『法華経』と並んで『般若経』の大きな特色である。

阿闍世王経 『道行般若経』で重要なことは、「強弱品第二四」・「累教品第二五」等に阿闍世の教理を説いていることである。『小品系般若経』や『大品系般若経』には阿闍世の教理は説かれていないが、阿闍世の教理は説かれている。阿闍世の教理は般若経とは関係のない

ところで成立したのである。これにたいして阿闍世の教理は『般若経』と関係が深い。『道行般若経』に阿闍世が説かれていることは、阿闍世の教理が西紀百年以前に成立していたことを示すものである。したがって支婁迦識訳の『阿闍世經』二巻は、『道行般若経』におとらず成立が古いことが知られる。阿闍世(アクシヨビヤ Akshobhya)は、「不動」と訳す。阿闍世菩薩は成仏を達成するまで、瞋恚によって心を動かされないと誓願を立て、この願を成じて東方に妙喜国という仏土を建立したという。

「仏国土を淨める」という淨仏国土の思想は、『般若経』に盛んに説かれるが、妙喜国の建立も淨仏国土の願行の現れと見てよい。菩薩の本願といえ、阿闍世の四十願が有名であるが、菩薩が願を立てるということは、大乘仏教では早くから行われていたと見てよい。なお阿闍世について、『維摩経』にも「見阿闍世品」があり、阿闍世を説いており、『大宝積経』に「不動如来会」が含まれており、この「不動如来」は阿闍世のことである。しかしこれらの外には阿闍世については見るべき経

典がない。即ち阿闍世は古く成立した割りに、その教理が發展しなかったのである。しかし七世紀に密教が現われると、阿闍世は大日如来を圧して、密教經典の中で次第に重要な位置を得ていく。

阿闍世の經典 支婁迦識の訳した經典の中に『般若三昧経』一卷がある。般若三昧とは觀仏三昧の一種であるが、とくに阿闍世を觀想することを説いている。このことは『般若三昧経』の成立した時、すでに阿闍世の教理が成立していたことを示すものであり、阿闍世の教理の源流も西紀百年以前の成立であることが分かる。但し専ら阿闍世の教理を説く經典としては、支婁(二三—二五三年訳経)の訳した大阿闍世經二巻が最初である。その後、『無量清淨平等覺経』四巻や『無量壽経』二巻が訳され、古来「五存七欠」と言われる程に翻訳が多い。阿闍世の教理を専ら説いているのは、『無量壽経』、『觀無量壽経』、『阿闍世經』のいわゆる淨土の三部經であるが、この外にも阿闍世に關説する大乘經典は非常に多い。それだけ阿闍世の極樂國土に往生することが、大乘仏教徒の大きな願いであったことが知ら

れる。それらの中でも、『慧印三昧経』・『私阿昧経』・

『菩薩生地経』・『無量門微密持経』・『老女人経』等は、阿闍世の信仰を鼓吹した經典である。阿闍世の淨土には、この仏の本願によって、この仏への信仰を持ち、この仏の名号を唱えるだけで往生できるのであり、この易行道の教えが、仏教徒の関心を強く捉えたのである。

華嚴系經典 『華嚴経』とは、詳しくは「大方廣華嚴経」という。「方広」とは「方等」と同じで、深義を説く經典の意味である。次の「仏華嚴」とは、仏陀を華で飾るという意味で、仏陀が成道において、あらゆる功德をそなえたことを、華鬘によって美しく飾られたことに譬えたものである。即ち『華嚴経』は、仏陀の悟りの世界を示した經典である。支婁迦識の訳した經典の中に『兜沙経』一卷があるが、これは『華嚴経』の「如来名号品」や「如来光明覺品」に相当する部分である。これによって、『華嚴経』の古層もすでに西紀一世紀に成立していたことがわかる。さらに支婁迦識の『菩薩本業経』や竺法護の訳した『漸備一切智徳経』、その他が『華嚴経』の部分であり、それらが綜合されて五世紀には『華

嚴経』六十巻が成立したのである。

首楞嚴三昧経 支婁迦識の訳した經典に『首楞嚴三昧経』がある。首楞嚴三昧は勇健三昧と訳し、般若波羅蜜の修行を推進する強い修行の力を指すのであるが、この行には終りがない。成仏して無余依涅槃に入ってしまったば、成仏の目的である衆生救済は不可能になるから、成仏の行を実践しつつ、しかも成仏するわけにはいかないのである。そのために仏になりうる力をそなえつつも、仏陀にならないのである。首楞嚴三昧とは、そのような無限の修行の力を意味するのであり、その実践者として文殊師利法王子を示している。この場合の法王子(クマールプータ)とは、童真とも訳し、青年の意味である。成仏を取らない文殊は、永遠の青年にとどまっているのである。釈尊も遠い過去に、小児であったとき、文殊の導きによって仏道に入ったという。そして文殊は菩薩のまま、或る時には竜種上仏、その他の仏陀の姿となって現われ、或いは辟支仏となって現われ、衆生を救済して、最後には涅槃を示し、衆生に舍利供養をなさしめて、功德を積ませるのである。しかし、実際には涅槃に

入らないのである。

文殊が永遠の青年であるのは、文殊は人間の本性である智慧を人格化した菩薩であるからである。そしてこの智慧を開発していく「行」が文殊であり、即ち首楞嚴三昧である。このように文殊は大乗仏教で重要な菩薩であるために、文殊を主題とした経典も多数に作られており、さらに『般若経』や『華嚴経』等、重要な大乗経典に現われて、中心的な役割を演じている。上記の『首楞嚴経』は支婁迦讖の訳出であるが、支婁迦讖の訳した経典に、なおこの外に『阿闍世王経』がある。この経は父王を殺した阿闍世が父殺しの罪におののいているのを、文殊が罪は空であることを説いて、阿闍世を五逆の悪業から脱出せしめたことを説いている。

このように文殊菩薩の経典も、大乗の初期から出現していた。しかも文殊の理念は、大乗仏教の特色を示す重要な教理である。

先行経典 ここには、初期の大乗経典について詳述することはできないが、これらの経典に先行する『六波羅蜜経』・『三品経』・『菩薩蔵経』等があったことを指摘し

て、大乗仏教の起源は、『道行般若経』の出現よりもさらにさかのぼることを示しておきたい。<sup>(6)</sup> 支婁迦讖の訳した『遺日摩尼宝経』には、『六波羅蜜経』と菩薩蔵を誦すべきことを説いており、支婁迦讖とほぼ同時期に安玄の訳した『法鏡経』には、昼夜六時に『三品経』を誦すべきことを説いている。この三品とは、懺悔・随喜・勧請である。<sup>(7)</sup> したがって『三品経』は懺悔・悔過を修する経典である。これらの経典が、支婁迦讖や安玄訳の経典に引用されていることは、支婁迦讖訳の経典の原本が作られる以前に、すでにこれらの経典があったことを示すものであり、大乗仏教の起源が更にさかのぼることを示すものである。

『三品経』の説く懺悔・勧請・随喜は大乗戒の基本になったものであり、小乗仏教には見られない大乗独自の行法である。仏前における懺悔の行が大乗の理念を醸成する有力な機縁になったと考えてよい。しかもこの「仏前」とは、「いまここに対面してある仏陀」である。それは、かつてこの世に住したが、いまは無余依涅槃界に入ってしまった仏陀ではない。そのような仏陀では、懺

悔を受けることはできない。しかし「常に現在する仏陀」の觀念は、仏塔信仰以外の所から生ずることは不可能である。次にここに示されている『六波羅蜜経』に比定しうる現存経典は見当たらないが、しかし『六波羅蜜経』は重要な経典として『大智度論』にも引用されている。おそらく仏伝文学の影響によって、大乗菩薩の修行として、最初は六波羅蜜が重視されたのであろう。それで『六波羅蜜経』が作られたが、そのうちに六波羅蜜の中で般若波羅蜜の優位が自覚されて、『般若経』が述作されたのであろう。

次に菩薩蔵については、『菩薩蔵経』と呼ばれる経典は現存するが、これらの経典に引用される菩薩蔵と現存の『菩薩蔵経』とがいかなる関係にあるか明らかでない。ともかく大乗仏教の興起は、西暦紀元前一世紀にまでさかのぼりうると考えるのである。

法華経 上述の如く、羅什訳の『妙法蓮華経』の方が、竺法護の訳した『正法華経』よりも、内容が古形を保存している。したがって羅什訳妙法華の原典は西紀二五〇年以前の成立と見てよい。しかしこの妙法華では、

第二十二品が「囑累品」であり、その後の六品は後世の附加と見られている。したがって二十二品までの成立は二五〇年よりも古いことになる。さらに二十二品の中にも新古の層があり、第二品から第九「授学無学人記品」までの八品の成立が古い。そしてこれらの八品の中でも、「方便品」を中心とする二・三品が最も成立が古いと見られている。このような新古の層の成立を勘案すると、「方便品」を中心とする最古層の成立は、西紀一五〇年ごろまでさかのぼりうるであらう。しかし一〇〇年までさかのぼらせることは困難である。その理由は、「方便品」に「三乘方便、一乘真實」の教理が説かれているからである。

三乗とは声聞乘・辟支仏乘・菩薩乘であるが、この場合の菩薩乘には、『法華経』以前の大乗仏教が含まれるわけである。「一乘真實」という場合の一乗が『法華経』であるから、『法華経』はそれ以前の大乗仏教までも三乗に含めて、これを方便として批判したわけである。したがって『法華経』が出現する前に、すでに若干の大乗経典が存在していたのである。それゆえ『法華経』を大

乗經典の最初期に位置づけることはできないのである。ともかく『法華經』は、三乘人がすべて成仏できる一乗の教えを開示したこと、さらに「如来寿命品」において、この土に応現した八十歳入滅の釈迦仏の背後に、無量無辺の寿命をもつ久遠実成の釈迦仏の存在を示している点に、それ以前の大乗仏教から一歩進んだ思想が見られる。

### 三、後期の大乗經典

大乗經典の前期と後期とを分けるものは、竜樹の『大智度論』である。『大智度論』は竜樹（一五〇—二五〇ごろ）の著作とされているが、これを疑う学者もある。しかしその場合でも、ほぼこれと同じ時代に『大智度論』が作られたことは認められている。したがって『大智度論』は西暦二〇〇年前後の成立である。『大智度論』は『大品般若經』の註釈であるが、その中に多くの大乗經典を引用しているから、そこに引用されている經典は、二百年以前の成立と見てよいのである。しかるに『大智度論』には、如来蔵思想や唯識思想が明瞭な形で現わ

れていないし、それに関係のある經典も引用されていない。

如来蔵思想の經典としては『如来蔵經』や『不増不减經』、『勝鬘經』などが重要であり、悉有仏性を明言した大乗の『涅槃經』もこの系統に属する。しかし『涅槃經』は四〇巻という大部の著作であるために、種々の教理を含んでいる。次に唯識系統には『解深密經』や『大乘阿毘達磨經』がある。さらに『楞伽經』は如来蔵と唯識との両思想を受けて、両者の綜合を企てていると言つてよいであろう。ともかく以上の如来蔵・唯識の両系統の經典を拠り所として、教理を展開したのが、瑜伽行派の弥勒（三三〇—四三〇ごろ）・無着（三九五—四七〇ごろ）・世親（四〇〇—四八〇ごろ）等である。

五大部 大本の『般若經』・『華嚴經』・『大宝積經』・『大集經』・『涅槃經』を五大部、あるいは五部大乗經という。これらは部分的な經典を綜合してできた叢書的な經典である。そしてその成立は『大智度論』以後であろう。例えば『般若經』について言えば『大智度論』は『大品般若經』の註釈であるから、大品・小品・金剛般若、

その他の『般若經』が綜合せられた「十六会」二十万頌の『大般若波羅蜜多經』の成立は、そのあとである。或いは『華嚴經』についても、『大智度論』では、『十地經』や『入法界品』が獨立經典として引用せられている。したがってそれらが一經にまとめられた『大華嚴經』六〇巻（或いは八〇巻）の成立はそれ以後である。しかし『華嚴經』六〇巻は、仏駄跋陀羅によって四一八年から四二一年間に訳出されているから、『大華嚴經』の成立は、四〇〇年以前と見てよい。

つぎに『大宝積經』は四九会一二〇巻として存在する。これは一人の訳出ではなく、竺法護以下多くの人の訳經を集め、不足している部分を唐の時代に菩提流志が補訳して、七一三年に完成した。しかし『大宝積經』の梵本は玄奘も將來したといわれ、菩提流志もたらしたから、その梵本の成立はインド、或いは西域であったであろう。『宝積經』の最古層は『遺日摩尼宝經』（『宝積經』第四三普明菩薩会）であるが、その外、多種多様の經典が含まれているために、これがいかなる観点から纏められたかは、検討の余地がある。

次に『大集經』は一七品六〇巻であるが、これは僧就が五八六年に、西域に大部の『大集經』があると聞いて、それに基いて既訳の經典を編集したものである。『如来蔵系統』の經典が多い。チベット訳にも『大集經』はあるが、漢訳ほどに多くの經典を含んでいない。次に大乗の『涅槃經』四〇巻は、四二一年に曇無讖によって訳出された。四一七年に、法顕によって『大般泥洹經』六巻が訳出されているが、これは曇無讖訳の前半一〇巻に相当する。これが増広されて曇無讖本になったのである。

以上、五大部の經典は成立年代も異なり、相互に關係はないが、前期が終ると、その整理としてこのような大部の經典の叢書が成立するようになった。

如来蔵系統の經典 如来蔵とは在纏位の法身といわれ、煩惱にまとわれた法身が如来蔵と呼ばれる。煩惱にまとわれているから、それは法身ではあるが純粹な法身とは異なる。それは煩惱に影響されている。そこに煩惱と法身との關係が問題になる。如来蔵の名がはじめて出てくるのは『如来蔵經』である。この經は法炬によって二九〇—三一二年間に訳出されたが、これは失われ、現存の

『如来藏經』は仏駄跋陀羅が四〇九—四二九年間に訳したものである。その後、不空の訳もある。若し法炬訳が事実であれば、すでに三世紀末に『如来藏經』が存在したことになる。その後、『央掘魔羅經』・『不増不减經』・『勝鬘經』等に如来藏説が説かれるが、とくに『勝鬘經』の説が整備されている。その後、宝性論や大乘起信論に如来藏思想は発展していく。

如来藏思想には前史があり、自性清浄心の思想や、如来性、仏性、仏子等の思想が先在しており、これらの思想から如来藏の思想が発展したと考えられている。その点では如来藏的な思想は、大乘仏教の多数の經典に説かれており、これは大乘仏教の全般に通ずる教理であると言つてよい。『法華經』の如くすべての衆生が成仏すると説くことは、一切衆生に仏性のあることを予想するものであり、これは如来藏的な思想である。大乘教徒が菩薩の自覚をもちうることも、自己の成仏を確信するからであり、それは自己に仏性があることを認めることにほかならない。大乘仏教が最初から菩薩仏教であったことは、最初から如来藏思想に発展する要素を持っていたの

である。

唯識仏教の經典 唯識の教理を組織的に説いたものは『解深密經』である。『解深密經』は、『深密解脫經』五巻として、菩提流支が五一四年に訳出したのが最初であるが、その前に、求那跋陀羅が四四三—四五三年に部分訳を出している。したがって五世紀中ごろには『解深密經』は成立していたであろう。その後、真諦、及び玄奘の翻訳がある。なお『解深密經』とほぼ同時代に『大乘阿毘達磨經』が存在したが、この經典は漢訳されなかった。しかしこの經は唯識系の論書に引用され、さらに無着の撰大乘論は『大乘阿毘達磨經』の「撰大乘品」を註釈したものと言われている。故にこの經も唯識仏教の発展に大きな影響を与えたことがわかる。

『解深密經』は阿頼耶識の教理をはじめて説いた經典であるが、これは輪廻の主体であるために、外道の説くアトマンと混同され易い。その点を敢えて説いた点で、この經を「解深密」と呼んでいる。これは秘密の結び目を解き示したという意味である。さらにこの經には、五性各別説や、有空中の三時教が説かれる等、初期の大乘

經典には見られなかった種々の特色がある。

唯識の經典としては『楞伽經』もその中に含めてもよいのかも知れない。この經は五法・三性・八識・二無我を説くといわれ、阿頼耶識を如来藏と同一視する説も見られ、折衷的な説を説いている。唯識説を体系的に説くためには、理論的・説明的になるために、經典の形式よりも論書の形式が適する。そのために唯識説を説く經典は上記二經でおわり、その後は論書に移行していく。そして『瑜伽論』・『撰大乘論』等をはじめ多くの論書において、唯識の教理が発展している。

金光明經 この經典は曇無讖が四一四—四三三年間に四巻として訳出したのが最初であり、その後、真諦訳、義浄訳等がある。この經には、唯識や如来藏の教理が説かれ、三身説の仏身論が説かれている。その外、懺悔の法や護国の四天王等がこの經を護持することを述べ、「流水長者品」には水路を絶たれた魚を救う話や、「捨身品」には餓虎に一身を施した薩埵太子の菩薩行を説き、四方四仏を説く密教的な教理も見られる。奈良時代の日本仏教に大きな影響を与えた。

なお密教を加味した經典はその後多数に作られ、これらを雜密と呼んでいる。そしての中には、大乘經典というよりも、密教を主とする經典が現われ、いわゆる『大日經』や『金剛頂經』等が出現するに及んで、密教經典の時代となるのである。『大日經』の成立は西紀六五〇年前後と見られている。

註

- (1) 『小品般若經』巻一、大正八、五三九上。その他。
- (2) 『道行般若經』巻一、大正八、四二六下。
- (3) 『小品般若經』巻一、大正八、五三八上。その他。
- (4) 『大品般若經』巻五、大正八、二五一上。
- (5) 同上、巻一、大正八、二一七下—一八上。
- (6) 拙著『初期大乘仏教の研究』七二頁以下参照。
- (7) 拙著、同上、一二〇頁以下参照。
- (8) 静谷正雄『初期大乘仏教の成立過程』一一八頁。

(ひらかわあきら・早稲田大学教授)